

## 服装文化系学術誌（家政学、服装史学など）

服装文化系学会誌および機関誌の主なものには、日本家政学会誌、繊維製品消費科学、日本服飾学会誌、国際服飾学会誌、服飾文化学会誌、衣生活などがあり、研究論文の発表の場になっている。掲載された研究の内容や論述は、同分野のみならず他分野の研究者、学生にも参考にされている。ここでは影響力のある雑誌の特徴を創刊順に取り上げる。

中でも服装造形系の研究は、第二次世界大戦後すぐには先行学問の材料学、衛生学、管理学、医学などの手法を取り入れながら進められ、近年では科学研究の趨勢に従って発展してきている。

各学会誌および機関誌の創刊号の巻頭言には、会の沿革や各雑誌の目指すところが述べられており、各誌の特徴が読み取れる。



「日本家政学会誌」  
56巻6号（2005年6月）表紙

### 家政学雑誌（1951－1986）→日本家政学会誌（1987－）

日本家政学会が発行する月刊誌。戦後、家政学関係の学部・学科をもつ女子大学の開設と時期を同じくして学会が誕生した。被服系の論文掲載の学会誌としては日本で最も歴史が古く、権威もある。38巻1号（1987年1月）より「家政学雑誌」から「日本家政学会誌」に改称された。専門分野は、家政学原論、家庭経営・経済・情報、家族、児童、食物、被服、住居、家政教育に分かれている。論文のテーマはこれらに環境、高齢者の生活が加わり、広範な分野にわたっている。被服には、材料、整理、染色、構成、衛生、心理、意匠、服飾などが含まれている。

53巻4号（2002年4月）－56巻3号（2005年3月）までの論文掲載の部門別内訳を見ると、被服に関する論文は、不掲載が3年間で6号分見られるが、食物の分野に次いで掲載数が多い。46巻（1995年）以降、3・8・12号の論文の多くは英文で発表されている。

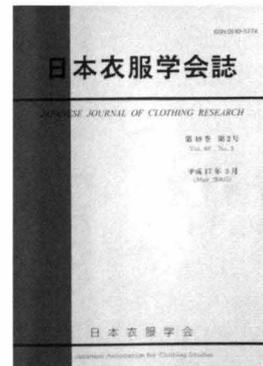
学生および正会員数は2005（平成17）年3月末現在、3332名の大きな学会である。2004年8月、京都で第20回国際家政学会議が開催され、36か国から1000人以上の参加者があった。インターネットのホームページも充実している。

### 衣服學會雑誌（1957－1984）→日本衣服学会誌（1984－）

衣服学会が年1回発行する学会誌。衣服学会の前身は1949（昭和24）年発足の衣服研究会である。創刊号には「衣服研究30年」のタイトルで緒方洪平が、衣服を対象とした研究分野の歩みについて述べている。

それによると、1932（昭和7）年に熱学的な研究が始められ、「被服材料そのものの熱衛生学的性質や衣服内空気層の在り方とその保温効果の研究へと発展して行った」とあり、先行学問の材料学および衛生学が被服研究のベースになったことがわかる。このような歩みからすると、被服衛生分野の論文が多く見られることもうなずける。

衣服研究会創設から35周年目にあたる1984（昭和59）年に、「衣服学会」から「日本衣服学会」に改称され、それに伴い誌名も「日本衣服学会誌」に改題された。28巻1号（1984年10月）には、改題の理由として「類似の学会と混同されないため」「海外機関に発表する場合のため」「外国在籍会員のため」の3点が挙げられている。インターネットのホームページが開設されている。



「日本衣服学会誌」  
48巻2号（2005年3月）表紙

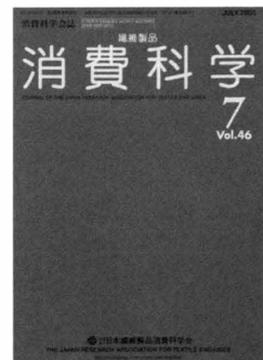
## 衣生活（1958－1996）

衣生活研究会が1958（昭和33）年より年6号ずつ発行してきた機関誌であるが、1996（平成8）年以降休刊されている。本会の目的については、創刊号で「新しい生地と製品の研究を行ない、材料、工作、美学、管理の各面につき消費科学上の正しい認識を得て当該教育の助成を図ると共に、優秀品の普及、発達に貢献する」としている。生地や繊維のサンプル数種が毎号に添付され、その特徴や価格に加え、デザイン画がサンプルの応用として掲載されている。毎号このサンプルをまず手にして感触を確かめ、風合いを感じ取ることができる。また、時には一部の家政系の卒業論文一覧もあり、学生会員にも利用しやすいように工夫されている。さらに、国内外の服装史、民族服、被服材料、被服衛生、家庭科教育、被服構成、アパレル産業などの解説は、参考書的な役割を果たし、研究成果の発表からはその時期の被服関係論文の傾向や研究の方法を読み取ることができる。

## 繊維製品消費科学（1960－）

繊維製品消費科学会が発行する月刊の学会誌である。創刊号の巻頭言では、掲載論文について、「平易であること」「新しいこと」を基本軸にしたいと述べている。

本誌は、研究論文に加えて被服材料、被服衛生、快適性・健康、心理、被服教育、デザイン教育、染織、家庭科教育、消費者教育、消費生活とマーケティング、服装史、文学・芸術とファッションなど様々な分野の解説が載っており、会員の知識を深める意図が強く感じられる。また、研究手法についてのアドバイスもあり、学会の研究水準の向上と発展を図ろうとする姿勢が読み取れる。



「繊維製品消費科学」  
46巻7号（2005年7月）表紙

被服製作に関する1990年代以降の論文には、人体計測やシルエットによる体型分析、上半身身頃のフィットパターン、動作の違いによるパターンの変化、コンピューターによるパターン製作、パターン設計と着質感、高齢婦人用衣服原型、原型のグレーディング、アームホール曲線などが扱われている。

### 衣生活研究（1974—1993）

1974（昭和49）年に衣生活研究会関西事務所は独立して関西衣生活研究会として発足。本誌は同研究会が年10回発行していたが、1993（平成5）年以降休刊されている。

創刊号の巻頭言では、学校の被服教育における基礎能力の開発とともに、新しい時代に敏感な新構想を取り入れて、拡充を図らなければならないとしている。

本誌は服装造形学を学ぶためのテキスト的な記事が毎号にあり、本誌の前身である「衣生活」を継承した部分もある。例えば、「パターンメイキングの研究」1巻1号（1974年4月）—1巻10号（1975年2月）、「被服のための人体計測入門」3巻1号（1976年4月）—3巻3/4号（1976年6/7月）、「被服構成学実習シリーズ」3巻5号（1976年9月）—4巻1号（1977年4月）などをはじめとする研究成果の発表や、新しい用語の解説は学生にもわかりやすく、論文中心の学会誌とは異なり、テキスト的な読みやすさが特徴の機関誌である。

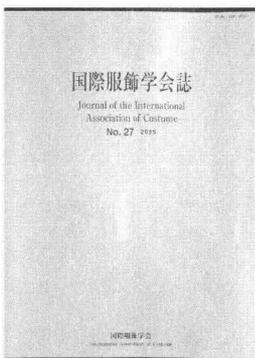
### 日本服飾学会誌（1982—2001）

日本服飾学会が年1回発行した。創刊号の巻頭言には、「研究は単に自己満足や学術的なものであってはならないし、そこには独創性に加えて、原理や方法に普遍性がなければならない」と述べられ、研究の基本姿勢を説いている。また、「燃犀な情熱を傾けた総合研究、社会に有用な国際性をもつ研究が求められている」とし、1980年代に入って急速に進んだグローバル化への対応の必要をうたっている。

本誌の論文には、日本各地の伝統的な手芸・染織・織物の種類や技術、日本をはじめとする近隣アジアおよび各国のフィールドワークによる民族服飾、日本における裁縫教育史、洋装史、史料の復元縫製、特定の時代の資料調査、アンケート調査などをまとめた論文が掲載されている。

### 国際服飾学会誌（1984—）

国際服飾学会が発行。2000（平成12）年より発行が年1回から2回となった。論文は、本国語と英語（または日本語）の2か国語で発表され



「国際服飾学会誌」  
No.27（2005年）表紙

ている。主な言語は、日本語、韓国語、中国語、英語で、外国の会員の論文も掲載されている。会員は日本を中心に韓国、台湾、中国に及ぶ。同学会の顧問として約20か国の研究者が名を連ねており、時に投稿しているのが特徴である。

論文のテーマは、日本をはじめ、欧米やアジア、中東の服装史・民族衣装・文様・染色・織物、立体構成のカッティング、ボディー設計、日本の洋服パターンの変遷などである。

国内の年次大会の研究発表とは別に、国際服飾学会議が隔年に開催され、同時に創作衣裳展も開かれている。2002年は日本、2004年は韓国で開催され、それぞれ「ART TO WEAR」というタイトルで日本、韓国、台湾の会員の作品が、カタログ集として出版されている。インターネットのホームページが検索できる。

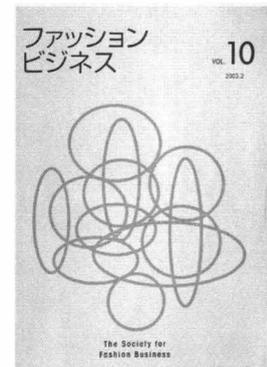
### ファッション環境 (1991-2005)

ファッション環境学会が年3または4回発行した学会誌である。創刊号には「多方面にわたる情報、多媒体をめぐる考え方を関係づけ、それをファッション環境という一点にしぼり込んでいく場」とし、ファッション環境をまだ確立していないファッション環境学にするために情報収集し、研究成果の総括をすることが本誌の目的であるとしている。

近年の論文をみると、衣服によるファッション表現、地場産業の扇、流行に対する男子大学生の反応、衣服がはらむ両義性、栄養調整食品購入の女子大学生の心理、ベーシックカラーの経年変化、大正-昭和期の下穿き、ファッション商品と女子大生の意識、魔女衣装の具象と抽象、ファッションショーにおけるデザイナーの伝達情報の相違などがある。特集では、モード、カーデザイン、建築の分野からみた「ファッション環境の近未来」や、在日外国人の視点と在外日本人の視点から日本をみた「日本発見」もある。2005（平成17）年度からファッションビジネス学会と合併された。

### ファッションビジネス (1994-)

ファッションビジネス学会が年1回発行。創刊は学会設立年度で、「ファッションビジネス学会論文誌」の創刊より1年早い。ほとんど毎号に特集が組まれている。創刊号からの特集のタイトルは「ファッションビジネス学会の展望」「21世紀——感性集約の時代に向けて」「アジアの時代」「イタリアに学ぶ」「ジャパン・クリエーション」「関西支部開設5周年記念合同研究発表会」「日韓ファッションビジネス学会学術交流会議」などである。創刊号の巻頭言で、学会設立趣旨について「新



「ファッションビジネス」  
vol.10 (2003年2月) 表紙

時代の大きな社会の流れの方向を探り、その学問としての体系化について研究討議し啓蒙を図る集団形成のため、ファッションビジネス学会の設立に至りました」と述べられているように、アパレル業界と学会が一体となって海外との交流を図ろうという意気込みが伝わってくる。また、特集以外では、学会の活動状況、ファッション産業界や研究開発の現況、ファッションの教育などについて紹介されている。

同誌全体から「感性」を探求テーマの一つにしていることがわかる。

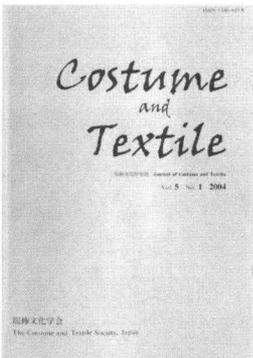


「ファッションビジネス学会論文誌」  
vol.10 (2005年3月) 表紙

## ファッションビジネス学会論文誌 (1995—)

ファッションビジネス学会が年1回発行。創刊号では、学界、教育界、産業界、ジャーナリズムに携わる人々が国境を超えて参集し、従来の社会通念や研究・教育の枠組みにとらわれない関心と論議を展開させたいとしている。また、研究成果や研究情報の発表・交換の場もできるだけ新しい方法を採用し、若い研究者がユニークな研究をアピールできる場として活用しやすいようにすることなどが述べられている。

掲載論文のテーマについて、2000 (平成12) 年以降のキーワードをいくつか挙げてみると、ブランド、ファッション意識、消費者意識、着装行動、自己表現、ユニフォーム、視覚的評価、購入衣服の着用実態、性役割、マーケティング、着心地評価、身体形態特徴、工芸染織製品、織物の色、紙おむつなどがある。服装社会学系のテーマを中心に、本学関係者の論文が多いのが特徴である。2005年度からファッション環境学会と合併された。インターネットのホームページを見ることができる。



「服飾文化学会誌 : Costume and textile」  
vol.5, no.1 (2004年) 表紙

## 服飾文化学会誌 : Costume and textile (2000—)

服飾文化学会が年1回発行。服飾関係では創刊が最も新しい。

巻頭言には、日本での西洋服装史研究の発展過程、参考文献、海外の学会誌の紹介など、資料を入手するための方法が具体的に紹介されている。また、東洋史学の研究視点として資料調査やフィールドワークの重要性が述べられている。

発表論文は、いわゆる材料や衛生などの実験を伴う研究、西洋および日本服装史・民族服の研究、史料の復元、アンケートを含む意識調査、製作に関する研究、教材研究など、巻頭言で述べられているように、服飾と文化がかかわる広範な分野が対象になっている。年次大会の際の研究発表には、口頭発表と共に被服製作やテキスタイルの創作展も同時に開催される。論文発表のみならず、創作活動も研究の分野であるとする同学会のスタンスは、学会のレベルで作品発表をしたい人にとっては有効である。インターネットのホームページを検索できる。(藤田恵子)